

## 価値尺度について

——宇野弘藏氏の所説によせて——

小林 威雄

—

貨幣商品、金は、二重の機能を基本的にはたす。貨幣商品、金のはたす二重の基本的な機能とは、価値尺度および流通手段という機能である。マルクスは、つぎのようにのべている。「金、すなわち価値の尺度として、また流通手段としてやくだつ特殊な商品は、社会のそれ以上の助けがなくても貨幣となる。銀が価値の尺度でもなく支配的な流通手段でもないイギリスで、銀が貨幣にならないのは、オランダで金が価値尺度としての地位を奪われるとたちまち貨幣でなくなったのと、まったく同様である。だからある商品は、まず価値尺度と流通手段との統一として貨幣となる。いにかえるならば、価値尺度と流通手段との統一が貨幣である」〔『経済学批判』、杉本俊朗訳、新訳、国民文庫版、一六〇ページ〕。価値尺度および流通手段という機能は、ある商品を貨幣たらしめる基本的な機能なのである。したがって、価値尺度という機能および流通手段という機能を正しく理解することは、貨幣を正しく科学的に理解するのに根

本的に重要なことである。

マルクスは、価値尺度機能をつぎのように、すなわち「金の第一の機能は、商品世界にたいしその価値表現の材料を提供する点、あるいは、諸商品価値を質的に同等で量的に比較されうる同名の大きいさとして表示する点、にある。かくして金は価値の一般的尺度として機能するのであって、独自の等価商品たる金がさしあたり貨幣となるのは、この機能によってにほかならない」(『資本論』第一巻、S. 99、長谷部訳、青木版、二〇五ページ)と規定しているのであるが、宇野弘蔵氏は、このマルクスの価値尺度の規定にもとづいて展開されている価値尺度論を批判し、独自の「価値尺度論」を旧版『経済原論』上巻(岩波書店、昭和二五年二月、この書物は旧『原論』上巻と略記する)、「マルクスの価値尺度論」(『マルクス経済学原理論の研究』、岩波書店、昭和三四年六月、所収、この書物は『原理論の研究』とする)などにおいて展開している。

本稿においては、宇野氏が価値尺度についてどのようにしているかをまず紹介し、その検討をおこない、宇野氏によって提起された問題を考察し、さらに宇野理論の解説者は、価値尺度についてどのように解説しているかを考察することにする。

なお、宇野氏の「価値尺度論」にたいしては、久留間較造氏が『思想』誌上において三回にわたって批判をおこなった(『マルクスの価値尺度論』I、II、III、『思想』四七四、四七六、四八一号)、また久留間氏の見解にたいして宇野氏は、おなじく『思想』誌上において反批判をかいている(『マルクスの価値尺度論について』、『思想』四八三号)。

本節においては、宇野氏が旧版『経済原論』上巻において貨幣をどのようにとらえているか、さらに価値尺度としての貨幣をどのように理解しているか、ということについて考察することにする。なお、この旧版『経済原論』上巻は、その下巻とともにすでに絶版になっており、入手が困難であるので、本稿と関連する文章はできるだけ引用しておくことにする。

旧版『経済原論』上巻は、「序論」、第一篇「流通論」、第二篇「生産論」からなりたっているが、貨幣は第一篇「流通論」の第二章において考察されている。なお第一章は「商品」である。第二章「貨幣」は、まずこの章でとりあつかわれる貨幣の諸機能についての概略をのべた「はしがき」があり、つづいて一「価値尺度としての貨幣」、二「流通手段としての貨幣」——この節は「はしがき」、A「商品の売買」、B「貨幣の流通」、C「鑄貨」からなりたっている——、三「貨幣」——この節は「はしがき」、A「蓄蔵貨幣」、B「支払手段としての貨幣」、C「世界貨幣」からなりたっている——、という構成になっている。

そこで、まず第二章「貨幣」の「はしがき」にかかれていることから考察することにする。

第二章「貨幣」の冒頭の文章はつぎのようになっている。

「あらゆる物が商品化する資本主義社会はいうまでもないが、ある程度に種々なる物が商品として交換せられることになる、この交換を媒介する貨幣は、常に商品の交換量に応じてその量が問題となる。一定量の貨幣がなければならぬ。」(旧『原論』、上巻、四二ページ)。

宇野氏は、貨幣についてかきはじめるにあたって、まず「交換を媒介する貨幣」をあげ、そして「常に商品の交換量に応じてその量が問題となる」とのべて貨幣の量の問題をあげている。マルクスは、貨幣の諸機能についての考察

においては、まず価値尺度としての貨幣をあげているのであるが、宇野氏は「交換を媒介する貨幣」をまずあげており、そしてその貨幣量の問題を提起しているのである。

宇野氏は、つづいてつぎのようにのべている。

「しかし貨幣は、まず商品の価値を一定量の金価格として実現することによって価値尺度として機能する。しかもこの機能においては、貨幣は実質的に価値を有するものとしてでなければならぬが、しかしなお個々の商品の購買手段として貨幣なのであって、商品の交換総量に対してその量が問題となるということにはならない」（旧『原論』、上巻、四二ページ）。

「しかし貨幣は」の「しかし」は、「この交換を媒介する貨幣は、常に商品の交換量に応じてその量が問題となる」、「だがしかし」という意味である。宇野氏は、まず「交換を媒介する貨幣」をあげ、「その量が問題となる」とかきはじめてののに、ここでどうして、これを否定して、宇野氏においては独自の解釈がなされているのであるが、価値尺度としての貨幣をあげているのであろうか。それはよくわからないが、『資本論』から学んだものを自分自身の考えを媒介する貨幣」について、そしてとくにその量の問題を重視したのであるが、『資本論』においては、貨幣の考察のさいしょに価値尺度が論ぜられているがために、そのまえに価値尺度についてのべようというように考えられたのではないかと思われる。

宇野氏は、貨幣の価値尺度という機能を「商品の価値を一定量の金価格として実現する」機能としてとらえている。そして「この機能においては貨幣は」、つまり価値尺度としての貨幣は、「個々の商品の購買手段として貨幣なの

「であ」としてゐるのであるから、価値尺度としての貨幣＝購買手段としての貨幣ということになる。そして、価値尺度という機能においては、貨幣は「商品の交換総量に対してその量が問題となるということにはならない」としてゐる。しかし、宇野氏においては、価値尺度としての貨幣は購買手段としての貨幣であるのであるから、購買手段としての貨幣の量が問題になるはずである。

ところで、「しかし貨幣は、……価値尺度として機能する」という文章の箇所に註がつけられており、この註において価値尺度という機能についての宇野氏の考え方がのべられている。宇野氏は、この註においてつぎのようになっている。

「一般に、価値尺度としての貨幣の機能は、商品がその価値を価格として表現することにあるとせられてゐる。『資本論』も大体そうしている。従来、私もそれにしたがって来たのであるが、それでは価値の尺度としての特殊な性格が把握出来ないように考えられる。商品の価値は、吾々が常識的に考える長さや重さのように単なる尺度をもって計量せられ得るものではない。物指にしてもあてて見なければ長さは測られないが、あてて見れば計量出来る。商品ではそういうふうには計量出来ない。商品が価格を与えられたからといって、それを直ちに価値を計量するものとするとは出来ない。物指をあてて見ることが、商品では交換されて見ることなのである。その点で商品が貨幣形態をとることをもって直ちに貨幣が価値の尺度として機能するとはなし得ないのである」(『原論』上巻、四三ページ、傍点——小林)。

「一般に、価値尺度としての貨幣の機能は、商品がその価値を価格として表現するということにあるとせられてゐる。『資本論』も大体そうしている」とのべているが、「商品がその価値を価格として表現するということ」は、商品

の価値を貨幣で表現するという商品の価値表現であって、このことが価値尺度としての貨幣の機能であるなどは、「一般に」理解されていない。宇野氏自身がそのように理解しているにすぎない。「資本論」も大体そうしているとのべているが、『資本論』における価値尺度の規定は、まえにも引用したように、「金の第一の機能は、商品世界にたいしその価値表現の材料を提供する点、あるいは、諸商品価値を質的に同等で量的に比較される同名の大きさとして表示する点、にある。かくして金は価値の、一般的な尺度として機能するのであって、独自の等価商品たる金がさしあたり貨幣となるのは、この機能によってにはかならない」となっているのであって、宇野氏がいうような価値尺度としての貨幣の機能は、「商品がその価値を価格として表現するということにある」などとはされていない。

「商品の価値は、吾々が常識的に考える長さや重さのように単なる尺度をもって計量せられ得るものではない」。長さや重さというのは物の自然的な属性である。商品の価値は、けっして商品の自然的な属性ではなく、商品のもっている社会的な属性である。したがって、商品の価値をはかる尺度は、物の自然的な属性をはかる物指や秤というような尺度とは本質的にことなつた意味における尺度でなければならぬ。ここに、価値尺度の「特殊な性格」があるのである。宇野氏は、一応、価値の尺度は物指や秤とはことなるということを理解しているようであるが、「物指をあてて見るということが、商品では交換されて見ることなのである」とのべているところから、長さや重さという物の自然的な属性をはかる物指や秤と商品の価値という社会的な属性をはかる価値尺度とを尺度という言葉にとらわれておなじものとしてとらえているということになり、価値尺度の「特殊な性格」をなんら理解していないということになるであろう。「商品が貨幣形態をとることをもって直ちに貨幣が価値の尺度として機能する」などとは理解されていない。

宇野氏は、価値尺度としての機能をあげ、価値尺度としての貨幣は購買手段としての貨幣であるとして、そのあとで流通手段についてつぎのようにのべている。

「ところが、個々の商品を購入する貨幣は、商品の価格を実現しつつ商品の交換を媒介するのであって、単に個々の商品の価値を実現するというものではない。いわば連続的に機能する流通手段となる。それと同時に貨幣は商品と商品との間の一時的な転形物たるに過ぎないものになって来る。したがってその実質的価値は、流通手段としての機能の範囲では、価値尺度としての貨幣と異って、むしろ問題でなくなつて来る。いわゆる鑄貨となるわけである。しかしそれは飽くまでも流通手段としての範囲に止まる。しかもこの流通手段としての貨幣の機能し得る範囲は、決して貨幣自身によって決定されるものではない。商品の流通が決定する。したがって貨幣は単に流通手段たるに過ぎないものとしては、流通手段たる機能をも尽し得るものではない。流通手段たる貨幣の量は、つねに商品の流通自身によって増減されざるを得ないからである」(旧『原論』、上巻、四二ページ)。

「個々の商品を購入する貨幣は、商品の価格を実現しつつ商品の交換を媒介するのであって、単に個々の商品の価値を実現するというものではない」という文章は、価値尺度としての貨幣は購買手段としての貨幣であると宇野氏はいつているのであるから、まったく意味のわからない文章となつてゐる。すなわち、「個々の商品を購入する貨幣」つまり「価値尺度としての貨幣」は、「商品の価格を実現しつつ」つまり「価値尺度として機能しつつ」「商品の交換を媒介するのであって」「単に個々の商品の価値を実現する」つまり「価値尺度として機能する」というものではない」ということになる。「価値尺度として機能しつつ、単に価値尺度として機能する」というものではない」という意味のわからない文章になつてしまつてゐることは、価値尺度としての貨幣を購買手段としての貨幣である

としていることに起因している。そして、またそれがために流通手段としての貨幣をも正しく理解することをさまざまにしているというようにいうことができるであろう。宇野氏にとっては、「交換を媒介する貨幣」が問題なのであって、この「交換を媒介する貨幣」が価値尺度として機能し、さらに流通手段として機能するというようにとらえようとしているのであろう。

宇野氏は、流通手段について以上のようにのべたあと「資金としての貨幣」をあげ、この「資金としての貨幣」についてつぎのようにのべている。

「ところが貨幣は、元來実質的価値を有するものとして価値尺度として機能し、流通手段としての貨幣もかかる価値尺度としての機能を基礎とするのであって、商品の流通過程外にあつても一定量の実質的価値を有するものでなければならぬ。そこで貨幣は、この流通過程に対して、つねに何時でも商品を購入し得る資金として貨幣であるということになる。それと同時にそれは此処ではすでに商品の価値を実現したものとして、いわば価値の独立的存在物として商品一般に対立する地位を占めるのである。そしてまたこの地位を与えられた貨幣は、流通過程における流通手段としての貨幣の量を、商品の流通の必要に応じて調節するものともなるのである」(旧『原論』、上巻、四二―三ページ)。

宇野氏がいう「つねに何時でも商品を購入し得る資金として」の貨幣というのは、マルクスの「貨幣としての貨幣」をさしているとしているのであるが、この宇野氏の「資金」については、別稿においてすでに考察したので、拙稿「資金」について(『立教経済学研究』、第二四巻、第三号、所収)を参照されたい。

第二章「貨幣」の「はしがき」のさいごはつぎのような文章である。



「この章では、商品の流通を媒介する流通手段としての貨幣を中心として、かくのごとき貨幣の種々なる機能を明らかにする。事実、商品経済では第一章で明らかにされた商品の価値と使用価値との内部的対立が、貨幣と商品との外部的对立となるのであって、社会的に行われる商品交換の過程は流通過程として明らかにされなければならない」（旧『原論』、上巻、四三ページ）。

「この章では」の「この章」とはいうまでもなく第二章「貨幣」であるが、貨幣の諸機能を考察する「この章」において、宇野氏は「商品の流通を媒介する流通手段としての貨幣を中心として」考察するのとべている。このことは、第二章「貨幣」の冒頭において、すでにみたように、まず「交換を媒介する貨幣」をあげていることと関連がある。まえにものべたように、宇野氏にあっては、貨幣は「交換を媒介する貨幣」なのである。「交換を媒介する貨幣」、「商品の流通を媒介する流通手段としての貨幣」、このような貨幣が宇野氏にとってはもっとも重視されている貨幣なのである。宇野氏は、価値尺度としての貨幣は購買手段としての貨幣であるとし、「交換を媒介する貨幣」であるのとらえており、価値尺度という機能が、ある商品、金を貨幣たらしめる基本的な機能の一つであるということを理解しないで、貨幣の諸機能のなかにおける価値尺度の正しい位置づけを理解していないということになる。

第二章「貨幣」の「はしがき」には、以上のようなことがかかれています。つぎに、第二章「貨幣」の第一節「価値尺度としての貨幣」にかかれていますことを考察しよう。

一「価値尺度としての貨幣」の本文は、四つのパラグラフからなりたっている。

#### 第一のパラグラフ

「商品がその価値を価格として実現するということは、いわば商品としての金が貨幣として出動する最初の行為で

ある。商品の価格は、商品が観念的に金になることであるから、現実に金を貨幣としてこれに対立せしめるものではない。実際また如何に商品が増加しようとも、単に価値を表示するだけであれば、貨幣なる金は現実にその商品に対するものとしてはその一片をも必要としない。しかしこの観念的に表示せられた価格は商品の所有者自身によって実現することは出来ない。貨幣の所有者によって購買される以外に方法はない。貨幣はかくして商品の価値の尺度となるのである。当然のことであるが、それは現実に貨幣が商品として他の商品と同質のものであり、一定の価値を有しているから果たし得るのである。しかしまた商品の価値は一般に決して一定不変のものではない。貨幣たる金の価値も、他の商品と同様に、変動するものとして尺度となるのであって、それは決してこの機能を妨げるものではない。むしろ価値の変動のないものであれば、それは商品ではなく、したがってまた貨幣として、商品の一般的等価物として商品を購入することも出来ないであろう。もちろん、貨幣たる金の価値が、例えば減少したとすれば、商品の価値に変化なくとも、価格は一般的に騰貴する、増加すれば反対に一般的に下落するが、それは一般商品の間の価値の関係には何等の影響をも与えるものではない。それがために貨幣が商品の価値の尺度たる機能を妨げられるわけではないのである」(旧『原論』、上巻、四四ページ)。

「金が貨幣として出動する最初の行為」は、商品の「価値を価格として実現する」ことであるとのとべている。この貨幣は、あきらかに購買手段としての貨幣である。宇野氏は、まず購買手段としての貨幣をあげなければならぬはずである。商品の価格の実現は、「貨幣の所有者によって購買される以外に方法はない」。宇野氏にあっては、価値尺度としての貨幣は購買手段としての貨幣であるのであるから、「貨幣はかくして商品の価値の尺度となるのである」ということができるのであろう。しかし、この文章をすなおに読めば貨幣は購買手段として機能するというように

なるであろう。「かくして」は、まえの文章にかわりなく、自分の主張を通すために無理につかつた言葉として読め、論理的のようにみせかけて論理の飛躍を平気でおこなっているように読める。

第一パラグラフの後半は、金の価値変動は価値尺度としての金の機能をさまたげないということについてのべている。なんらかの原因によって金の価値が増大しても、また減少しても、他の事情に変化がないとすれば、この金の価値変動は、ただすべての諸商品の価格を同時に、同じ割合で下落させるか、または騰貴させるだけである。したがって、金の価値変動によって、すべての諸商品相互の相対的価値関係は、以前よりも低い、あるいは以前よりも高い価格となるけれども、なんの変化も生じない。金の価値変動は、価値尺度としての金の機能をさまたげないのである。

## 第二パラグラフ

「しかしまたかかる商品の価格の変動は、実際は貨幣をもって商品を購入するという過程を通さないではあらわれない。金の価値における変動が直ちに商品の価格の変動となつてあらわれるわけではない。単なる価格形態としての変動は購買過程におけるかかる変動を反映してあらわれるに過ぎない。元来、商品の価値は、貨幣で価格として表現されたからといって、それは決して価値をそのままに表現するものではない。したがってまた価値の大きいさも正確に表現されるわけではなく、価値以上にも、価値以下にも表現せられ得る。さらにまた貨幣で購買されたとしても、それはなお価値を実現したとはいえない得ないものを残している。売手個人としては、その商品の価値を実現したと考えるにしても、そしてまた考えてもよいのであるが、客観的にはそうはいえない。価値以上に販売したこともなれば、価値以下に販売したこともなる。しかしそれも繰り返して行われる過程となると、それぞれの商品は、いずれも一定の基準によって売買されざるを得ない。例えば一定量の小麦と鉄とは一定の時期には平均して一定の価格をもつ

ものとして互に一定の価値関係を有しているが、それはこの繰り返えし行われる購買を通して明らかにされるのである。そしてそれは金の価値を媒介にして行われるのであるが、小麦にしても、鉄にしても、さらにまた金にしてもそれぞれその価値は常に一定しているというものではない。いずれもその価値を変動し得るものとして、かかる関係を實現する。また実際、商品の価値と価格とが時によって乖離し得るといふことは、商品の価値の表現たる価格形態の欠陥をなすものではない。むしろそれは商品が元來個々の個人の需要するものを社会的に他人によって交換を通して供給せられるという特殊の性質を有し、価格の変動を通してより外には、互に同じ質のものとして比較計量せられ、交換せられる基準としての価値をあらわし得ないということから当然に起ることであつて、それに適応した形態なのである。それと同時に貨幣は他の商品と同様にその価値を変動するものであり乍ら、価値の尺度として機能する。それは何人によつても、また如何なる機関によつても商品の価値が決定せられるものでないという事実に対応するものに外ならない」(旧『原論』、上巻、四五―六ページ)。

価格の変動について、宇野氏は別のところでつぎのようにのべている。

「金にしても、商品にしても、その価値の変動は、簡単に、直接的に、価値表示としての価格の変動にあらわれるわけではない。実際に売買が行われる価格の変動する過程において、新しい価値関係に適応した価格を形成してゆくのである。その点に価値尺度としての貨幣の機能もあるわけである」(『マルクスの価値尺度論』、『原理論の研究』、五四ページ)。また「価値を離れた価格による売買が行われるとしても、それは繰り返されることによつて——結局は生産過程自身によつて——訂正されてくるのである。そしてそれこそ貨幣の価値尺度としての機能をなすものである」(『原理論の研究』、五五ページ)とものべている。

そこで、宇野理論の解説者、鎌倉孝夫氏は、「貨幣によって行なわれる商品価格の実現が、くり返りくり返し行なわれることになれば、これを通して価値から離れた価格は訂正され、価格を商品の価値水準へと帰着させることになるのである。この意味において商品価格を実現する貨幣の購買手段としての機能は、商品価値を尺度する機能を果たすことになる」(宇野弘蔵編『資本論研究』Ⅰ、筑摩書房、一九六七年九月、一五六ページ、この書物は『資本論研究』Ⅰとする)と、また「価値尺度としての貨幣は、商品をくり返し購買することによって、高すぎる価格を下げさせ、低すぎる価格を上げさせ、価格をその変動の中心水準へと収斂させる機能を果たすのであり、商品価格を価値に帰着させるものとして機能するのである」(『資本論研究』Ⅰ、一六二ページ)と解説している。

宇野氏は、さきにもたように、旧版『経済原論』上巻の第二章「貨幣」の「はしがき」においては、「貨幣は、まず商品の価値を一定量の金価格として実現することによって価値尺度として機能する」としていた。しかし、この第二パラグラフのところへきて、「貨幣で購買されたとしても、それはなお価値を実現したとはいえないものを残している」とのべている。「商品の価値を実現する、この貨幣の機能こそ、貨幣を商品の価値尺度たらしめるのである」(宇野弘蔵編『経済原論』、青林書院、一九五五年四月、五二ページ、この書物は旧演習『原論』とする)から、「貨幣で購買されたとしても」、なお貨幣は価値尺度として機能したとは「いい得ないものを残している」ということとなる。なぜ「貨幣で購買されたとしても」、「貨幣が商品の価格を実現したとしても」、貨幣は価値尺度として機能したとは「いい得ないものを残している」のかというと、「価値以上に販売したこともなれば、価値以下に販売したこともなる」からである。旧版『経済原論』においては、これにつづいて「しかしそれも繰り返して行われる過程となると、それぞれの商品は、いずれも一定の基準によって売買されざるを得ない」ということをしめすに

どまっている。しかし論文「マルクスの価値尺度論」においては、「価値を離れた価格による売買が行われるとしても、それは繰り返されることによって訂正されてくるのである。そしてそれこそ貨幣の価値尺度としての機能を出すものである」としており、商品の価格の実現がくりかえしおこなわれることによって、商品をくりかえし購買することによって、価値から離れた価格が訂正され、価格を一定の基準へと帰着させる、そういう機能をはたす貨幣が価値尺度としての貨幣であるとしているのである。したがって、価値尺度としての貨幣は、たんに「商品の価値を一定量の金価格として実現する」貨幣ではないということになる。なお、この問題については、またのちにとりあつかうことにする。

### 第三パラグラフ

「金を一般的等価物として、あらゆる商品がその価値を価格として表示すれば、全商品は観念的に金の一定量となる。この分量を計る単位としては、前にも述べたように当然に金の重量単位が使用されるわけであるが、本位貨幣の変化（例えば銀の一定量に用いられた重量名が、新しく本位貨幣となった金に対してはもはやそのまま金の一定量の重量をあらわさないにも拘らず使用されるといふような場合には、貨幣名は重量名と分離するのであるが）その他の便宜的理由から、重量名とは離れた種々なる単位名が用いられる。円、磅、弗、マルク等はいずれもそれぞれの国において一定重量の金に与えられた名称である。しかしそれは単に価格の標準単位にすぎないのであってその決定を価値の尺度としての金の機能と混同してはならない。金二分を円と名づけたとすれば、一匁は五円となるが、それは価値の単位であって、一定量の金が他の分量の金に対して単位として役立つだけのことである。それは同一使用価値の量的関係である。これに反して金が価値尺度として機能するのは、価値物として他の商品の価値を実現することによ

って行われる。価格の単位が種々なる分量の金によって一般商品の価値を表示する際に技術的に必要とせられる基準にすぎないのとはまったく異っている。したがって貨幣の価値が変化したとしても、その価格の単位自身にはなんらの影響もあるわけではない。金の価値の如何にかかわらず、一匁の金は、二分の金の五倍である。五円が一円の五倍であることはいうまでもない。このことから金の貨幣としての価値をなにか不変のもののごとくに考えるのはまったく誤っている。同じ一円にしても金の価値に変動があれば、前にも述べたように商品の価格は一般的に変動せざるを得ない。金はその価値が、他の商品と同様に変動するものであるからこそ、価値の尺度として機能し、価格の単位としては、不変の重量単位として固定しているから役立つのである。価値の尺度という場合は、そういう意味をもっている」(旧『原論』、上巻、四七―八ページ)。

このパラグラフにおいては、価格の度量標準について説明し、価格の度量標準の機能と価値尺度の機能とを混同してはならないということ、金の価値変動は価格の度量標準の機能をさまたげないということについてのべている。なお、ここでは「金が価値尺度として機能するのは、価値物として他の商品の価値を実現することによって行われる」というようにのべられている。

#### 第四パラグラフ

「かくのごとく価値尺度としての貨幣は、観念的にその価値を金によって表示する商品を現実的に金に実現することによって貨幣として機能するのであるが、商品はすでにかかる表示において観念的にはあるが、社会的に互に価値としてあるのに対して、貨幣はこれを個別的に実証しようというのである。貨幣は、すでに商品によって社会的に等価値とせられるものであるから、これを個別的になし得るのであるが、それは必ず種々の商品について個別的にな

されるのである。実際またあらゆる商品が同時に金に実現されるということは、あり得ないことであるし、またそれは商品が互に価値としてある関係を実証する所以でもない。いい換えれば貨幣は、この機能のためには社会的に全商品の総価格に対応した一定量を必要とするということにはならない。もちろん、個々の商品の価値を実現するには、それぞれの価格に対応した貨幣がなければならぬ。しかしそれはいわば個々の貨幣所有者の個別的な事情によるものである。そこで問題は新にこの個々の貨幣の所有者が如何にして貨幣を所有するに至ったかということに發展して来る。元来、金も他の商品と同様に生産されなければ貨幣として商品と交換されるものにはならない。しかし生産される金がすべて貨幣として機能するわけではない。原始的には貨幣はかかる商品としての金から発生したのであるが、すでに購買手段として出動し、この機能を果たすことになる、一般に他の商品と異ってこれを得た者によってそのまま物として消費せられるものではない。繰り返えし機能する。金の生産者を別とすれば、貨幣としての金は、何人の手にあつても商品の価格を実現したものといえるのである。また一般にかかるものとして購買手段ともなる。かくして貨幣は、個々の商品に対しては価値の尺度として機能しつつ、同時にまた商品の社会的交換を媒介することによって、流通手段として機能するのである」(旧『原論』、上巻、四九—五〇ページ)。

「価値尺度としての貨幣は、観念的にその価値を金によって表示する商品を現実的に金に実現することによって貨幣として機能するのである」とのべているが、これは、まえにみた「はしがき」のなかででてくる「貨幣は、まず商品の価値を一定量の金価格として実現することによって価値尺度として機能する」というのと表現はすこしことなっているがおなじである。ところで、このばあいの貨幣、すなわち価値尺度としての貨幣は、「商品は」「観念的」にはあるが「すでにかかる表示において」、つまり価格において「社会的に互に価値としてあるのに対して」、「これを」



つまり価格を「個別的に実証しようというのである」とのべている。すなわち、価値尺度としての貨幣は、商品の価格を個別的に実証するのであるというのである。宇野氏の価値尺度としての貨幣は、まえにみたように購買手段としての貨幣なのであるから、このように商品の価格を個別的に実証する貨幣なのであると考えるのであろう。しかし、貨幣のはたす諸機能、価値尺度、流通手段、「貨幣としての貨幣」の諸機能、蓄蔵貨幣、支払手段、世界貨幣という諸機能は、けっして個別的な機能ではなく、すべて社会的な機能である。

つぎに、宇野氏は、「貨幣は、この機能のためには社会的に全商品の総価格に対応した一定量が必要とするということにはならない」とのべている。「この機能のためには」ということは「価値尺度の機能のためには」ということであるから、ここでは宇野氏は、貨幣が価値尺度として機能するためには、貨幣量は問題にならないということをとべているのである。しかし、宇野氏の価値尺度としての貨幣は購買手段としての貨幣であるから、商品の価格を実現する貨幣の量が問題とならなければならないはずである。それなのに、宇野氏は「それはいわば個々の貨幣所有者の個別的な事情によるものである」とかたづけてしまっている。そして「個々の貨幣の所有者が如何にして貨幣を所有するに至ったか」という問題をあげているが、この問題は流通手段としての貨幣における問題であって、価値尺度としての貨幣における問題ではない。

さいごに、宇野氏は「かくして貨幣は、個々の商品に対しては価値の尺度として機能しつつ、同時にまた商品の社会的交換を媒介することによって、流通手段として機能するのである」とのべ、価値尺度の機能と流通手段の機能との関係についてのべようとしている。しかし、なんともものべているように、価値尺度としての貨幣は、宇野氏にあっては購買手段としての貨幣であるのであるから、「個々の商品に対しては」「購買手段として機能しつつ」、「同時にま

た商品の社会的交換を媒介することによって、流通手段として機能する」というようになり、ならん価値尺度としての機能と流通手段としての機能との関係を説明するものとはなっていないということがわかる。

以上が、旧版『経済原論』上巻第二章「貨幣」の「はしがき」および「価値尺度としての貨幣」のところで見られている本文の内容である。

### 三

つぎに、マルクスが展開している価値尺度論を批判している宇野氏の「マルクスの価値尺度論」を考察し、そこで宇野氏によって提起されている問題を検討することにしよう。

宇野氏は、『資本論』第一巻第三章「貨幣または商品流通」の第一節「価値の尺度」の第二パラグラフを引用し、つぎのように論評している。

「たしかに〈金なる特殊商品〉が、まず〈貨幣〉となるのは、〈商品世界に対してその価値表現の材料を供〉することによってであることは、価値形態論の成果としての〈貨幣形態〉で明らかである。しかしそれが果たして金の〈機能〉といつてよいか、どうか。種々なる、あらゆる商品が、その価値を金価格として表示するためには、マルクスもいつているように、また商品経済社会にいる限り何人も知っているように、〈一片の現実の金をも必要としない〉（岩一八三頁、青一二〇七頁）。それは〈機能〉するといつても、〈観念的〉なるものとしてにすぎない。ここで金は、諸商品の価値表現のために〈材料を供〉するといつても金自身の積極的な機能としてではない。諸商品の側から、それぞれの商品所有者が、その商品について金幾何とやら交換してよろしい、といつているにすぎない。こんなこと

は今さらいうまでもないことであるが、それが経済学では反って明確でないのである」(『原理論の研究』、四七ページ)。

宇野氏は、「商品世界に対してその価値表現の材料を提供する」ということが「果たして金の〈機能〉」といつてよいか、どうか」という問題を提起し、「あらゆる商品が、その価値を金価格として表示するためには」、「一片の現実の金をも必要としない」から、このばあいの金は「観念的」なものにすぎない、したがって、このばあいは「金自身の積極的な機能」ではないとのべている。この問題については、別の箇所において宇野氏が「解答」をあたえているので、これをとりあげて考察してみよう。

宇野弘蔵編旧演習『経済原論』のなかで「価値表示手段たることは貨幣の機能と言えないか、表示は測定でないか」という「問題」にたいして宇野氏はつぎのように「解答」している。

「商品がその価値を価格として表示するときには、貨幣はなおその機能を積極的に發揮しているとはいえない。それはなお商品の側のことである。商店の商品は、貨幣と相對することなくして価格を表示する。しかしそういう場合にも、すでに特定の商品が貨幣とせられているのであって、貨幣は機能しているのではないか、またそれは商品の価値をはかっている尺度をなすのではないか、という疑問が生じうる。また貨幣の価値尺度としての機能は、マルクスにあつてさえかかるものと解されているようである。しかしそれでは貨幣によって商品の価値をはかる特殊の性格が見失われるのではないかと思う。価値をはかるということは、吾々が重さや長さをはかるのと同じにすることはできない。重さや長さでもはかりにかけたり、物さしをあてて見なければならぬが、商品の場合にはそれが貨幣によって買われ、貨幣と交換されることであつて、単に価値を価格として表現するということではない。すでに繰り返し行われている売買を基礎として表示されるために、表示自身が尺度されているように考えられるが、それにして

も表示と尺度されることとは同じにはされえない。売れもしない商品の価格をもってその価値がはかられたとは何と  
してもいいえない。表示を測定と同一視するのは、重さや長さが交換されることなくして測定されるということから  
来る誤った考えである」(旧演習『原論』、五五ページ)。

「商品がその価値を価格として表示する」ということ、いいかえれば商品がその価値を貨幣で表現するというこ  
は、あきらかに「商品の側のことである」。「商品がその価値を価格として表示するときには」、一般の等価物として  
の貨幣がすでに存在している。貨幣が存在しているからこそ、商品はその価値を価格として、貨幣で表現することが  
できるのである。しかし、宇野氏は、商品の価格表現においては、貨幣は表象的または観念的な貨幣としてやくだつ  
にすぎない、このばあいの貨幣は観念的な貨幣であるから、貨幣はなお「積極的に」貨幣としての機能をならはた  
していない、とするのである。観念的な貨幣といっても、それは現実の貨幣、金が観念化されているのであって、幻  
想ではない。「価格はまったく実在的な貨幣材料に依存している」(『資本論』、第一巻、S. 101、長谷部訳、青木版、二〇  
七ページ)のである。観念的な貨幣であると、貨幣はなんの機能もはたしえないのであろうか。貨幣が生成しており、  
存在しているからこそ、商品はその価値を貨幣で表現することができるのであるが、このばあい貨幣はなんの役割を  
もはたしていないといえるであらうか。貨幣は、このばあいには、あきらかに、商品にその価値を表現するための材  
料としてやくだっている。マルクスは、この貨幣の役割、機能を価値尺度機能と規定したのである。しかし、宇野氏  
は「それでは貨幣によって商品の価値をはかる特殊の性格が見失われるのではないかと思う」という。「貨幣によっ  
て商品の価値をはかる」、それは「貨幣によって買われ、貨幣と交換されることであって」、貨幣の購買手段としての  
機能、これが宇野氏の貨幣の「積極的な機能」であり、価値尺度機能なのである。

ところで、貨幣がはたす諸機能は、「貨幣によって」「積極的に」なんらかの機能をはたすことによって生じるものではない。貨幣が商品に内在する価値性質により必然的に商品そのものから生成してくるのと同様に、貨幣のはたす諸機能はすべて商品の側からあたえられる、あるいは商品流通からうけとるのである。したがって、貨幣のはたす諸機能は、商品によってあたえられる受動的な機能なのである。「貨幣によって買われ、貨幣と交換されること」によって、「商品の価値をはかること」ができるのであり、ここで貨幣は価値尺度として機能するのだと考える宇野氏は、貨幣の諸機能がどうして発生するのかということを理解していない、また貨幣の諸機能を科学的に正しく考察し、研究する方法を理解していないといわざるをえない。

宇野氏は、「売れもしない商品の価格をもってその価値がはかられたとは何としてもいいえない」とのべているが、商品に価格がつけられればその価値に社会的に妥当する価値表現があたえられ、その価値ははかられているのであって、売れるか、売れないかということは価値尺度とは別の問題である。

さいごに、宇野氏は「重さや長さが交換されることなく……」とのべているが、「重さや長さが交換される」とはどういうことなのであろうか!? 交換ということを宇野氏は理解しているのであろうか。

貨幣が商品の価値を価格として表現することを貨幣の価値尺度機能といえないか、という「問題」にたいして、宇野氏は、また宇野弘蔵編現代経済学演習講座、新訂『経済原論』（青林書院新社、一九六七年一月、この書物は新演習『原論』とする）においてつぎのような「解答」をあたえている。

「問題」。「商品価値を価格として表現することは、貨幣の価値尺度機能といえないか。また、もしいえないとしても、商品の価値表現は、なんらかの意味での貨幣機能とはいえないだろうか。」

「解答」。「資本論」も貨幣の価値尺度機能を、商品価値の表現にあるようにいつているが、それでは一般的等価物としての貨幣の一般的な直接的交換可能性——いいかえれば、商品には一般的に失われた、この等価物としての機能——が不明確になる。商品の価値表現は、マルクスもいつているように、現実には貨幣なくして行ないうる、観念的なものである。これを貨幣の機能というのは、機能という言葉あまりに広く使うことになるのではないか。現実に貨幣が商品の購買にあたる時、貨幣が機能するというほうが適当だと思ふ。またそれでこそ価格と価値との特有な関係が説ける。尺度といつても、長さや重さのような計り方がなされるわけではない。この点が『資本論』では不明確なために、たとえば後に説かれる市場価値論などが首尾一貫しなくなつてゐると考えられる」(新演習『原論』、五—六ページ)。

まず、「問題」において「商品の価値表現は、なんらかの意味での貨幣機能とはいえないだろうか」となつてゐるが、「商品の価値表現」は、あくまで商品の価値表現であつて、それが「なんらかの意味での貨幣機能とはいえないだろうか」などとはけつしていえない。

宇野氏は「資本論」も貨幣の価値尺度機能を、商品価値の表現にあるようにいつている」とのべてゐるが、『資本論』においては「商品世界にたいしその価値表現の材料を提供する点に」、あるいは「諸商品価値を質的に同等で量的に比較される同名の大きいさとして表示する点に」あるとなつてゐるのであつて、「商品価値の表現」にあるなどとはなつてゐない。宇野氏は、商品の価値の表現と貨幣が商品の価値を価格として表現するということを同一視し、混同してゐる。

たしかに「貨幣の価値尺度機能を商品価値の表現にある」とすれば、「一般的等価物としての貨幣の一般的な直接

的交換可能性が不明確になる」であろう。しかし、貨幣が商品の価値を表現するというばあいには、貨幣の一般的な直接的交換可能性は明確である。つづいて、宇野氏は、まえの「解答」とおなじように、「商品の価値表現は」「現実には貨幣なくして行ないうる、観念的なものである」、したがって、商品の価値表現においてはただ表象的なまたは観念的な貨幣が充用されるにすぎない、観念的な貨幣であるから、貨幣が商品の価値を表現する材料としてやくだつということを経済の機能としてとらえることはできない、「現実には貨幣が商品の購買にあたる時、貨幣が機能する」のだとのべている。宇野氏の価値尺度としての貨幣は購買手段としての貨幣であるから、宇野氏は「現実には貨幣が商品の購買にあたる時」、「貨幣は価値尺度として機能すると考えるのであろうが、しかし「現実には」「商品の購買にあたる」貨幣は、流通手段として機能する貨幣であつて価値尺度として機能する貨幣ではない。

宇野氏は、「マルクスの価値尺度論」の「二」においてつぎのようにのべている。

「商品価値の貨幣形態、いいかえれば価格は、いわばなおその商品所有者の私的な、主観的評価にすぎない。それは他の同種商品所有者の、あるいは過去の評価にならつたといつても、主観的評価たるを免れない。社会的な、客観的な評価を受けているわけではない。マルクス自身もいつているようにへいかなる商品番人も、その商品の価値に価格の形態または表象された金形態を与えたとしても、彼はまだそれらを金化したのでない……ことを知っている」(若一八三頁。青一二〇七頁)。それはなお金自身の側からその商品の価値を尺度しているわけではない。それだからこそ、そういう価格表示のためには、〈幾百万という諸商品価値の金での評価にも、現実の金の一片をも要しない〉(同上)のである。ところが金による商品の価値の評価も、金自身の側からする場合には、現実の金なしには、たとい一円の商品といえども、なしうるものではない。商品の側で与えた価格が私的で主観的であるのに対して、貨幣の

側からの購買による〈価値尺度〉は、社会的な、客観的なものとなるわけである」(『原理論の研究』、五二―三ページ)。

まえに考察したように、さきには宇野氏は、商品の価格表現においては貨幣は表象的または観念的な貨幣としてやくだっているにすぎない、このばあいの貨幣は観念的な貨幣であるから、貨幣はなお「積極的に」貨幣として機能しているとはいえない、したがって、貨幣が商品の価値を表現する材料としてやくだつというのは貨幣の価値尺度機能であるとはいえない、としたのであるが、こんどは価格は商品所有者の私的な、主観的な評価であるにすぎず、「社会的な、客観的な評価を受けているわけではない」、したがって「それはなお金自身の側からその商品の価値を尺度しているわけではない」とする。つまり、価格は商品所有者が勝手につけたものであるから、私的な、主観的な評価である、したがって実際にその価格で売れるかどうかからない、だから、貨幣が商品の価値を表現する材料としてやくだつということをもって価値尺度として機能するというようにはいえないのである。そして、まえとおなじように、商品が首尾よく売れたときにはじめて価格は「社会的な、客観的な」ものになるのであるから、「貨幣の側からの購買」によって、つまり購買手段としての貨幣の機能が価値尺度機能であるとするのである。

貨幣の諸機能を正しく理解するためには、貨幣を単純な商品流通の領域内において考察することが必要であるが、このばあい商品流通はその純粋な姿においてとらえなければならない。

商品の価格とは、商品の価値を貨幣で表現したものであって、商品の価値の大きさの必然的な、社会的に妥当する表現である。たとえ、商品の価値の大きさとおりに貨幣で表現されていなくとも、それが価格であることにはかわりがない。「かりに、同等な大きさの社会的必要労働が、一クォーターの小麦で表示され、また二ポンド(約二分の一オンスの金)で表示されるとしよう。二ポンドは、一クォーターの小麦の価値の大きさの貨幣表現、すなわち一クォ



一ターの小麦の価格である。いまでも諸事情が、一クォーターの小麦に三ポンドの値段を付けることを許すならば、あるいは、これに一ポンドの値段を付けることを余儀なくさせるならば、一ポンドおよび三ポンドは、この小麦の価値の大きさの表現としては過小あるいは過大であるが、それにもかかわらず、それらはこの小麦の価格である。ただしそれは、第一には、この小麦の価値形態たる貨幣であり、第二には、この小麦の貨幣との交換関係の指標であるから」(『資本論』、第一巻、s. 107、長谷部訳、青木版、二一六―七ページ)。

価格の大きさを決定するのは、価値尺度としての貨幣でもなく、また購買手段としての貨幣でもなく、貨幣の機能の外部に横たわっている諸事情である。したがって、商品の価格を純粹に考察するためには、価格は価値どおりの価格として前提してとらえることが必要である。価格というものが商品の価値の貨幣形態であることを、商品の価値の価格への転形をあきらかにし、理解するうえにおいては、価値の大きさから価格が背離するというようなことを考察する必要はとくにない。なぜなら、この価値の大きさから価格が背離するということは、この背離をひきおこす外部の諸事情とともに捨象されてしかるべきことであるからである。価値尺度としての貨幣の機能を純粹に考察するためには、価格は価値どおりの価格として前提しなければならないのである。価値尺度としての貨幣は、商品の価値の大きさを表現するのであって、その大きさ自身を決定するものではない。購買手段としての貨幣は、商品の価格の大きさを決定するのではなく、商品の価格を実現するのである。宇野氏は、価格は「その商品所有者の私的な、主観的評価にすぎない」ととらえることによって、価格が商品の価値の貨幣形態であるということ、価格という概念を正しく理解しえなくしており、また貨幣の価値尺度機能を正しく理解しえなくしている。

第二節においてみたように、宇野氏は、旧版『経済原論』上巻においては、はじめ価値尺度としての貨幣の機能を

「商品の価値を一定量の金価格として実現する」という機能であるとし、そして、この機能をはたす貨幣は購買手段としての貨幣であるとしたが、さらに「貨幣で購買されたとしても、それはなお価値を実現したとはいえないものを残している」とし、そして「しかしそれも繰り返して行われる過程となると、それぞれの商品は、いずれも一定の基準によって売買されざるを得ない」ということをしめすにとどまっていたのであるが、「マルクスの価値尺度論」においては、「価値を離れた価格による売買が行われるとしても、それは繰り返されることによって——結局は生産過程自身によって——訂正されてくるのである。そしてそれこそ貨幣の価値尺度としての機能をなすものである」とのべている。すなわち、貨幣によっておこなわれる商品の価格の実現がくりかえしくりかえしおこなわれることによって、これを通して価値から離れた価格が訂正され、価格を「一定の基準」へと帰着させる、こういう機能をはたす貨幣の機能こそが価値尺度機能であるというのである。したがって、宇野氏の価値尺度機能とは、宇野氏自身ははじめに規定したような、たんなる「商品の価値を一定量の金価格として実現する」という機能ではないということになる。

しかし、宇野氏は、「金にしても、商品にしても、その価値の変動は、簡単に、直接的に、価値表示としての価格の変動にあらわれるわけではない。実際に売買が行われる価格の変動する過程において、新しい価値関係に適應した価格を形成してゆくのである。その点に価値尺度としての貨幣の機能もあるわけである」とのべたり、「価値を離れた価格による売買が行われるとしても、それは繰り返されることによって訂正されてくるのである。そしてそれこそ貨幣の価値尺度としての機能をなすものである」とのべたりしているのであるが、これらのところでのべられていることは、価格の水準がどのようにして、なにによってきまるかということであって、このことが貨幣の価値尺度とし

ての機能であるなどとはまったくいえず、このようなことのうちに貨幣の価値尺度としての機能があるわけではけっしてない。

宇野氏は、新演習『経済原論』において、「価値尺度機能は一定の価格において商品価値を社会的に確認させる点にある、とされているが、そうだとすれば、商品がその価値から背離れた価格で売買された場合、貨幣は価値尺度として機能したことになるのか、それともならないのか」という「問題」にたいしてつぎのように「解答」している。

「もちろん価値から背離れた価格を実現する貨幣を、それだけでただちに価値尺度の機能を果たしたとはいえない。しかしそういう背離れた価格の実現は、価値への一致への動機となるわけで、その点では価値尺度の機能の一要因となる。もし商品の価値の表現をもって貨幣の価値尺度機能とし、その価格の実現がつねに行なわれるとすれば、商品の無政府的生産は否定されていることになる」（新演習『原論』、五五―六ページ）。

宇野氏は、価値尺度機能をさいしょには「商品の価値を一定量の金価格として実現する」機能と規定したのであるから、「価値から背離れた価格」といってもそれが商品の価格であることはまちがいがなく、その価格を実現する貨幣は宇野氏にとつては価値尺度として機能したといえることができるはずであるが、ここでは「価値から背離れた価格を実現する貨幣を、それだけでただちに価値尺度の機能を果たしたとはいえない」とする。宇野氏の価値尺度についての理解のうちには、つねに価値の大きさという量的問題が重視されている。したがって、「価値から背離れた価格」を実現したとしても貨幣は「ただちに価値尺度の機能を果たしたとはいえない」というのである。だがしかし、商品の価値の大きさを絶対的にとらえることができないうところに商品生産の特色があるのである。つづいて宇野氏がいっていることは、「背離れた価格の実現」においては貨幣は価値尺度機能をはたしていないが、それは「価値へ

の一致への動機となるわけで、その点では価値尺度の機能の「要因となる」、「価値尺度として機能していないが価値尺度の機能の「要因となる」!? ということである。

宇野氏は、周知のように、いわゆる「流通論」において商品、貨幣を論ずるのであり、そのさいには価値を「全面的に交換されるものとしての同質性」(『原理論の研究』、四九ページ)としてしか規定していない。したがって、宇野氏は、この段階においては、価値の実体は抽象的・人間的労働であり、それが対象化され、物質化されたものが価値であるという価値規定をとりいれない。「価格はそのままでは価値ではない。したがって同じ価値が変動する価格で表示されうるものとしなければならない。われわれはまだ商品の価値が如何なる実体を有するか、それが何故一定量とせられるかを明らかにしえないので、ここでは単に種々なる価格で実現される商品も、繰り返されるうちには大体一定の価格に落ちつく傾向を有するものとして、一定量の価値があるものとしなければならないというだけである」(旧演習『原論』、五五ページ)。「価格の変動はその動揺たえまのない反覆においてある重心を有するのであって、この重心としての〈価格〉は直ちに価値量の正確なあらわれではないにしてもそれとある関係を有する。むしろこの変動の中心をなす〈価格〉こそわれわれにとって諸商品の〈価値〉としてあらわれるものなのである」(旧演習『原論』、五三ページ)。

宇野氏は、価値の実体はなんであるか、価値とはなにか、価値の大きさはなにによって規定されるのか、ということとをなんらあきらかにしないで、価値を尺度するとか、価値と価格とが背離するとかということを問題にしているのである。価値の実体規定、価値規定、価値の量的規定なしに、価値がいかにして尺度されるかという問題、さらには価値と価格との背離という問題をどうして展開することができるのであろうか。宇野氏は、物事を現象的のみとら

え、本来、捨象して考察すべき需要供給の関係や、「商品の売買のくりかえし」などということを導入して、これらの要因と貨幣の購買手段としての機能によって、価値の大きさがあたえられるかのようにしているのである。

宇野氏は、商品の価値がなぜ貨幣で尺度されなければならないかという問題でなく、価格はなにによって価値の大きさに近づくかということを問題にしている。売買がくりかえされると価格は一定の水準を中心として変動するであろう。しかし、それは「商品の価値は、それをめぐって商品の価格が動き、それに価格のたえざる騰落が平均化する重心だということの意味するにすぎない」(『資本論』第三卷、S. 203、長谷部訳、青木版、二六七ページ)のである。

宇野氏は、価値と価格とが合致するかしないかを価値尺度の基準にしており、売買がくりかえされることによって一定の水準におちつく価格を価値としてとらえ、商品価格を価値に帰着させるということが価値尺度としての貨幣の機能であるとしてとらえており、価値尺度機能を価値の大きさという量的な問題としてとらえようとしているのである。

なお、宇野氏は「マルクスの価値尺度論」の「三」のなかにおいて、つぎのようなことをのべている。

「マルクスにとつては、商品流通を〈純粹に考察〉するためには、商品は当然にその価値によって販売される〈平常的経過が前提され〉なければならなかったのである。ところが労働生産物の商品への転化、さらにまたそれから必然的に要請されるその貨幣への転化は、同時にその転化の〈成功〉を〈偶然的〉にする。そこでこの〈偶然〉的事態が社会的には〈平常的経過〉を形成することになる——その形態規定が問題なのであって、〈現象〉を〈純粹に考察〉するためとはいえ、〈平常的経過〉を〈前提〉することは、この形態規定を不明確にすることになる。理論的考察はむしろその間の関係を明らかにしなければならない」(『原理論の研究』、六〇ページ)。

「そこでこの〈偶然〉的事態が社会的には〈正常的経過〉を形成することになる」とのべているのであるから、宇野氏は、論理の出発点は「正常的経過」にあるのではなく、「偶然的事態」にあると考えていることになり、そして「偶然的事態」から出発して「正常的経過」を形成することを展開してゆくその「形態規定」が問題なのであり、このようなことが「理論的考察」の課題であるとしている。「価値を離れた価格による売買がおこなわれるとしても、それがくりかえされることによって、価格は一定の水準に帰着されることになり、価格と価値量との不一致が訂正される、このような過程においてこそ貨幣は価値尺度としての機能をはたすのである」とする宇野氏の価値尺度についての規定もこの方法論にもとづいているものである。

しかし、このような宇野氏の方法論は科学的に正しい方法論であろうか。

「偶然的事態」というものは、基準としての「正常的経過」があつて、これとの関係においてのみ意味をもつものである。一定の基準、理論的な基礎となるものは「正常的経過」のもとにおいてとらえることができるのであるから、「正常的経過」が想定されていなくて、どうして「偶然的事態」について考察し、これについて論ずることができるであろうか。「正常的経過」の想定のもとにおいて諸関係、諸規定をとらえ、これらの諸関係、諸規定があたえられてこそ、そののちにはじめて、「正常的経過」におけるそれらから背離する「偶然的事態」についての考察が可能となるのである。宇野氏の方法論は、まったく転倒した非論理的な方法論であるといわざるをえない。

さいごに、宇野弘蔵編『資本論研究』において宇野理論にもとづいて貨幣の価値尺度機能を解説し、その問題点をあげ、論評している鎌倉孝夫氏の叙述のなかから、つぎの三つの点をとりあげておこう。

(一)「問題点」⑬「商品形態の展開と価値尺度との関連」のなかにつぎのような二つの叙述がある。

「こうしたマルクスの価値形態論完成への方向に立って、さらにこれを発展させるならば、価値尺度としての貨幣は、さきに述べたように、貨幣の積極的に果たす第一の、基本的な機能たる購買手段の機能として設定されることになるであろう」(『資本論研究』、一五二—一三ページ、傍点——小林)。

「これによって流通手段としての貨幣もまた、貨幣の第一の、基本的機能たる価値尺度を前提として展開されうるものとなったのである」(『資本論研究』、一五三ページ、傍点——小林)。

いったい貨幣のはたす「第一の、基本的な機能」は、購買手段としての機能なのであろうか、それとも価値尺度としての機能なのであろうか？ まえにみたように宇野氏は価値尺度としての貨幣は購買手段としての貨幣であるとしたがために、このような理解のしにくい文章がでてくるのである。

(二)「問題点」⑭「価値尺度の規定」のなかにある叙述。

「金が商品世界に〈価値表現の材料を提供する〉ということは、諸商品の側で、その共通な価値表現の〈材料〉として、金を一般的等価形態におくことにほかならず、ここでは金は受動的に、すなわち商品所有者の側から、等価形態におかれるのである」(『資本論研究』、一五四—一五ページ)。

金が商品世界に「価値表現の材料を提供する」ということは、諸商品の側で、諸商品の共同事業によって諸商品の共通の価値表現の材料として金を排除し、金を一般的等価形態におき、この一般的等価形態におかれた金が諸商品の価値を表現する材料としてやくだつ、諸商品の価値表現に材料を提供するということであって、「諸商品の側で、その共通な価値表現の〈材料〉として、金を一般的等価形態におくことにほかならず」ないとか、「金は受動的に、商品所有者の側から、等価形態におかれる」とか、ということの意味しているわけではけっしてない。

(三)おなじく「問題点」⑭「価値尺度の規定」のなかにおいて三宅義夫氏の説を批判している叙述。

「つぎに三宅の字野に対する批判はつぎのようなものである。三宅はまず、諸商品の価値表現の材料となっている貨幣の規定を、〈商品の貨幣での価値表現を、貨幣の側からとらえているものであり、価値形態「論」でのいわば裏返しとも見うる〉(『資本論講座』(1)、二三四頁)とし、〈貨幣の方を主格とし〉(同上)たものであるといっている。しかし、商品価値が貨幣によって表現される時、貨幣は受動的に、商品の側から等価形態とされているにすぎず、現実には貨幣は〈主格〉となっているわけではない。もしこの関係において、同時にこれを〈貨幣の側からとらえ〉るとしたり、〈貨幣の方を主格とし〉たりするというならば、相対的価値形態と等価形態との対立関係という単純な事態をも、正當に理解しえていないことを意味する」(『資本論研究』、一五九—一六〇ページ)。

「商品価値が貨幣によって表現される時」、「このときにはすでに貨幣は生成しており、金は貨幣として存在しているのであって、このとき「貨幣は受動的に、商品の側から等価形態とされているにすぎ」ないというわけではない。「商品価値が貨幣によって表現される」ということは、商品の価値の貨幣での表現であり、商品の価値表現であって、このことはあきらかに商品の側のことである。字野理論の論者は、商品の価値の貨幣での表現ということと貨幣が商品の価値を表現するということを混同しているのであるが、貨幣が商品の価値を表現ということは貨幣の側のことであり、貨幣を主格としている。価値形態論における貨幣形態、これは商品の価値の表現形態であり、商品がその価値を貨幣で表現する形態である。この貨幣形態を商品の側からでなく、貨幣の側から、貨幣を主格として考察すれば、ここでは貨幣が商品の価値を表現しているということ、貨幣が商品の価値を表現する材料となっているということがあきらかになるから、三宅氏は、貨幣が諸商品の価値表現の材料となっているということとは、「商品の



貨幣での価値表現を、貨幣の側からとらえているものであり、価値形態論でのいわば裏返しとも見うる」といわれているのである。商品の価値表現を「同時に、これを〈貨幣の側からとらえ〉るとしたり、〈貨幣の方を主格とし〉たり」しているわけではけっしてない。

#### 四

宇野氏は、マルクスの貨幣の価値尺度としての機能は「商品世界にたいしその価値表現の材料を提供する点に、あるいは、諸商品価値を質的に同等で量的に比較されうる同名の大いさとして表示する点に、ある」という規定を、貨幣が諸商品の価値を表現するというばあいには、貨幣はただ表象的な、観念的な貨幣であるにすぎないから、このばあいには貨幣はなお「積極的に」貨幣としての機能をなんらはたしていないという理由から、そして価格は「その商品所有者の私的な、主観的評価」であるにすぎず、「社会的な、客観的な評価」をうけているわけではない、したがって商品に価格がつけられるということ、すなわち貨幣が商品の価値を表現し、価格として表示するということは、貨幣の側から商品の価値を尺度しているというわけにはいかなないという理由から、そしてさらに貨幣が商品の価値を表現する材料としてやくだつというばあいには、貨幣はまだ貨幣として「出動」していないから、なんら貨幣としての機能を果たしていないという理由から、批判をくわえ、そして旧版『経済原論』上巻においては、はじめ「貨幣は、まず商品の価値を一定量の金価格として実現することによって価値尺度として機能する」としたのである。

商品の価値を貨幣が表現するばあいには「現実の金の一片も要しない」。貨幣はただ表象的な、観念的な貨幣である。しかし、このばあい観念的な貨幣であるにすぎないから、貨幣はなんの機能もはたしていないなどとはいえない

い。貨幣は、ここでは商品にその価値を表現するための材料としてやくだっているのであり、商品の価値を社会的に妥当する形態において表現するという機能をはたしているのである。マルクスは、この貨幣の役割、機能を価値尺度機能と規定したのである。「価値尺度」という機能においては、貨幣は、ただ表象的、または観念的な貨幣としてやくだつのである」(『資本論』第一巻、S. 101、長谷部訳、青木版、二〇七ページ)。

宇野氏は、貨幣が商品の価値を表現するというばあいには、貨幣はただ表象的な、観念的な貨幣であるにすぎないから、このばあいには貨幣はなお「積極的に」貨幣としての機能をなんらはたしていないというように、貨幣の「積極的な」機能を強調される。宇野氏は、貨幣の諸機能は貨幣によって「積極的に」商品にはたらきかけるさいにはたされるものであると理解している。しかし、貨幣の諸機能は、貨幣によって「積極的に」なんらかの機能を商品にはたらきかけることによって生じるものではない。貨幣は商品のもつ価値という性質によって必然的に商品そのものから生成してくるという貨幣生成の必然性と同様に、貨幣はたす諸機能はいずれの機能にあつても、商品の側から、あるいは商品流通からあたえられるものである。宇野氏は、貨幣生成の必然性を正しく理解せず、たんに価値形態論の考察によって貨幣生成の必然性が解明されるとする。「マルクスは、〈貨幣の必然性〉に対して、所謂第一、第二、第三の価値形態の発展を通じて、相対的価値形態が如何なる発展を遂げ、これに対応して等価形態が如何なる発展をなしたか、更に又等価形態が遂に一般的等価形態として一商品に固定し、貨幣形態が完成する迄に、此等の両形態は如何なる関係を展開して来たかということの詳細に分析している。そしてそれは単に詳細に分析したというだけではない。商品の二重性質が展開するそれ自身の発展として、これを解明している。かくして始めて〈如何にして、何故に、何によって商品は貨幣であるか〉(マルクス) という最も困難な点——即ち〈貨幣の必然性〉は明かにせられる

のである」(宇野弘蔵「貨幣の必然性」、『資本論の研究』、所収、岩波書店、昭和二四年四月、六八ページ)。そして貨幣の諸機能を科学的に正しく把握するためには、貨幣を単純な商品流通の領域内において考察し、しかもこの商品流通は純粋な姿において把握し、貨幣の諸機能は商品の側から、あるいは商品流通からあたえられるのであるという貨幣の諸機能についての研究方法を理解していかないのである。

宇野氏のマルクスの価値尺度についての規定を批判する第二の理由は、価格は「その商品所有者の私的な、主観的評価」であるにすぎず、「社会的な、客観的な評価」をうけているわけではない、したがって貨幣が商品の価値を表現し、価格として表示するということは、商品の価値を尺度しているというわけにはいかないということである。宇野氏は、価格を商品所有者の私的な、主観的な評価としてとらえるのである。貨幣の諸機能を科学的に正しく把握するためには、まえにのべたような貨幣の諸機能の研究方法にもとづいて考察しなければならない。この研究方法のもとにおいては、商品流通を単純な形態において、しかも純粋な姿においてとらえるのであり、商品の価格とは商品の価値を貨幣で表現したものととしてとらえ、そして価格は、社会的に妥当する商品の価値の表現形態であるととらえるのである。価格の大きさを決定するものは、貨幣の機能の外部によこたわっている諸事情であるが、これらの外部的な諸事情はここでは捨象されているのである。したがって、価格は価値とおりの価格としてとらえ、そしてこの前提のうえにおいて、貨幣の諸機能をとらえることが必要なのである。しかるに、宇野氏は、このような貨幣の諸機能についての研究方法を理解せず、価格をより具体的な段階においてとらえ、価値と価格とが背離するというようなことを問題にしているのである。しかし、価格が商品の価値の貨幣での表現形態であるということ、商品の価値の価格への転形ということを理解するためには、価値と価格との背離というような問題をとりあげる必要はない。価値と価格

との背離をひきおこす諸事情は、ここでは捨象されているのである。

宇野氏が価格は商品所有者の私的な、主観的な評価であるにすぎないとし、そしてその価格で実際に販売されるかどうかわからないなどということ想定して貨幣の価値尺度機能を把握しようとしていることは、価格というものが商品の価値の貨幣での表現形態であるということ、そもそも価格とはなにかということ、それを正しく理解しようとしていない証拠である。

宇野氏は、価値尺度としての貨幣が商品の価格を社会的に、客観的に評価するものであるかのように説いているが、価値尺度としての貨幣が商品の価値の大きさを決定するわけではなく、また商品の価格を決定するものでもない。価値尺度としての貨幣は、商品の価値を価格として表現するのである。

宇野氏のマルクスの価値尺度についての規定を批判する第三の理由は、貨幣が商品の価値を表現する材料としてやくだつというばあいには、貨幣はまだ貨幣として「出動」していないから、なら貨幣としての機能を果たしていないということである。

宇野氏においては、貨幣の諸機能は貨幣が「積極的に」商品にはたらきかけるときにはたされる。商品の価値を表現する貨幣は表象的な、観念的な貨幣であるから、現実には交換において商品にたいして「出動」していない。したがって、貨幣が商品の価値を表現するということは、貨幣の機能ではないとするのである。商品との交換において「出動」する貨幣、それは購買手段としての貨幣である。そこで、宇野氏の独特の価値尺度機能が、旧版『経済原論』上巻において、まずはじめに「貨幣は、まず商品の価値を一定量の金価格として実現することによって価値尺度として機能する」とし、「この機能においては、貨幣は……なお個々の商品の購買手段として貨幣なのである」というよう

にされるのである。

宇野氏は、旧版『経済原論』上巻第二章「貨幣」の「はしがき」のところで、まず「交換を媒介する貨幣」をあげ、そして価値尺度機能の説明において「商品の価値を一定量の金価格として実現する」機能であるというように「価格を実現する」ということをのべ、そして「購買」ないし「購買手段」とはどういうことを意味するものであるかについてはあきらかにしないで、価値尺度としての貨幣は購買手段としての貨幣であるとしている。

貨幣が生成すると、商品の交換過程は、相対立し、かつ相互に補足しあう二つの姿態変換からなりたつことになる。すなわち、商品の貨幣への転形という商品の第一の姿態変換、 $W \rightarrow G$ 、販売、および貨幣から商品への商品の再転形という商品の第二の姿態変換、 $G \rightarrow W$ 、購買からなりたつことになる。

$W \rightarrow G$ という過程は、商品の価値を観念的に貨幣で表現し、商品の貨幣にたいする観念的な関係のうちにしめされていたにすぎなかった価格が実現されて、商品が現実の貨幣に転形される過程である。この $W \rightarrow G$ という過程は、商品所有者にとっては貨幣がかれの商品にとってかわる過程であり、他方、貨幣所有者にとっては商品がかれの貨幣にとってかわる過程である。すなわち一つの過程が二面的な過程である。商品所有者の側からみれば販売であり、貨幣所有者の側からみれば購買である。そこで、販売は同時に購買であり、 $W \rightarrow G$ は同時に $G \rightarrow W$ であるといわれる。金生産者のばあいを別にすれば、商品の第一の姿態変換は、他の商品の第二の姿態変換であるということになる。

$G \rightarrow W$ という過程は、貨幣から商品への商品の再転形の過程である。貨幣は絶対的に譲渡されうる商品である。これにたいして商品は、すべていつでも貨幣に転形されることを望んでいる。したがって、貨幣は、一定の分量の範囲内であれば、いかなる種類の商品とも直接に交換することができる。ところで、この $G \rightarrow W$ という過程は、 $W \rightarrow G$

において貨幣に転形することができた商品が再び貨幣形態をぬぎすてて特定の商品に再転形する過程であるが、他方、商品所有者の側からみれば、商品の貨幣への転形の過程である。ここでも一つの過程が二面的な過程である。貨幣所有者の側からみれば購買であり、商品所有者の側からみれば販売である。そこで、購買は同時に販売であり、 $G$ — $W$ は同時に $W$ — $G$ である。あるいは商品の第二の姿態変換は、他の商品の第一の姿態変換であるといわれる。

一つの商品の総体的姿態変換を構成する販売と購買という二つの逆の運動は、商品形態—貨幣形態—商品形態という一つの循環を形成する。しかし、この循環においては、第一に、さいしょの商品とさいごの商品とは使用価値を異にしている。商品は、その所有者にとり、出発点では非使用価値であり、終点では使用価値である。第二に、この循環においては、貨幣は、はじめには商品がそれに転形する価値結晶として現われ、それからの中には商品のたんなる等価形態として消滅する。

一つの商品の循環は、二つの部分的な姿態変換からなっているが、これらの部分的な姿態変換はもつとも簡単なばあいには同時に他の二つの商品の逆の部分的な姿態変換である。たとえば、ある商品の循環を $W_1$ — $G$ — $W_2$ としよう。第一の姿態変換である $W_1$ — $G$ は、 $G$ が他の商品 $W$ の $W$ — $G$ の結果であると前提すれば、それじたいが $W$ — $G$ — $W_1$ の第二の姿態変換であり、また $W_1$ の第二の姿態変換である $G$ — $W_2$ は、他の商品 $W_2$ の $W_2$ — $G$ 、すなわち第一の姿態変換である。さらに、 $W_1$ の第二の姿態変換は、 $G$ がただ一つの販売 $W_1$ — $G$ の結果であるとしても、それは多数の購買に分裂せざるをえないから、多数の諸商品の第一の姿態変換に分裂することになる。こうして、それぞれの商品の姿態変換がえがく循環は、他の諸商品の諸循環とときがたく絡みあっている。その総過程は商品流通として現われる。諸商品の循環は、商品流通を形成することになるのである。

ところで、貨幣は、商品の姿態交換においては、まず第一の姿態交換で商品の脱皮した価値の姿態として販売者の手にはいり、ついで第二の姿態交換でいかなる商品とでも交換されうる姿態として購買者の手を離れる。第一の姿態交換  $W-G$  における  $G$  は、 $W-G$ 、 $G-W$  が相独立していることを反映して、長かれ短かれ一つの休息点を形成するが、 $W-G$  が  $G-W$  によってひきつづき補足されるかぎり、 $G$  の交換価値の独立的な定在としての実在性は一時的なものであるにすぎない。したがって、 $W-G$ 、 $G-W$  が過程的に統一されてなしとげられた結果をみると、結局  $W-W$  という質料交換に帰着することになり、貨幣は  $W-W$  を媒介したにすぎないことになる。こうして、貨幣は、諸商品のたんなる交換手段として現われる。しかし、それぞれの商品の姿態交換は、他の諸商品の姿態交換と相互にときがたく絡みあっており、商品流通を形成するのであるから、貨幣は、諸商品のたんなる交換手段としてではなく、商品の流通過程によって性格づけられた交換手段として、すなわち流通手段として現われるのである。商品流通を媒介する貨幣は、流通手段という機能をうけとることになる。

この流通手段としての貨幣に商品流通があたえる運動形態は、貨幣がたえず出发点から遠ざかる、つねに購買者の手から販売者の手に移ってゆくという運動である。このばあい、商品はつねに販売者の手にあり、貨幣はつねに購買者の手にあって、販売者の手にある商品の価格を実現することによって、購買手段として機能する。したがって、流通手段としての貨幣は、つねに購買手段として現われる。貨幣が流通手段として商品流通を媒介するためには、つねに購買手段として機能しなければならないのである。

宇野氏は、貨幣の価値尺度としての機能を「商品の価値を一定量の金価格として表現する」機能としたのであるが、商品の価格を実現する貨幣は価値尺度としての貨幣ではなく、購買手段としての貨幣であり、購買手段としての

貨幣は購買者の立場からみた流通手段としての貨幣である。価値尺度としての貨幣は購買手段としての貨幣であるとする宇野氏は、価値尺度機能を誤って理解しているばかりでなく、流通手段としての貨幣の機能をも正しく理解していないといわざるをえない。

宇野氏は、旧版『経済原論』上巻においては、すでにのべたように、価値尺度機能を「商品の価値を一定量の金価格として実現する」機能としていたのであるが、論文「マルクスの価値尺度論」においては、「価値を離れた価格による売買が行われるとしても、それは繰り返されることによって訂正されてくるのである。そしてそれこそ貨幣の価値尺度としての機能をなすものである」としている。すなわち、宇野氏は、商品がたんにある価格で貨幣によって購買されたとしてもただちにその価値とおり価格が実現されたということはできない、実現された価格は価値以上あるいは価値以下であることもありうる、だが、それもくりかえしおこなわれる過程となるとそれぞれの商品はいずれも「一定の基準」によって売買されることになる、貨幣によっておこなわれる商品の価格の実現がくりかえしおこなわれることになれば、これを通して価値から離れた価格は訂正され、価格を「価値水準」へと帰着されることになる、これこそが価値尺度の機能なのであるというのである。

まず第一に、宇野氏が貨幣について考察する「流通論」においては、価値の実体について、価値の大きさについてなんの規定をもあたえていないのであるから、そもそも商品の価値について論ずることができず、「価値を離れた価格」、「価値と価格との背離」など問題にすることはできないはずである。

第二に、ここでのべられていることは、価格の水準がどのようにしてきまるかということであって、価値尺度機能とはまったく別の問題である。



第三に、「価値から離れた価格」を実現する貨幣は、宇野氏にとっても価値尺度機能とはいえないということになるから、宇野氏の価値尺度についての理解には、つねに価値の大きさ、それもなによって規定されるかもあきらかにしていない価値の大きさという量的な問題が重視されている。

以上、宇野氏の価値尺度について考察してきたが、このような価値尺度論が展開されることになったのは、まず価値の実体はなにか、価値とはなにか、価値の大きさはなによって規定されるのか、という問題をとりあつかわないで、実体—本質規定のない「形態論」のもとで、貨幣について、価値尺度機能について考察しようとしたところに根本的な原因があり、さらに、貨幣の諸機能を科学的に考察するために必要とされる研究方法を理解しないで、現象を表面的にとらえ、種々の具体的な諸関係を一緒くたにして考察しているところに原因がある。このような貨幣についての研究方法においては、貨幣の諸機能がどういうものであるかを正しくあきらかにすることはできない。

(昭和四六年九月一六日)